

茶道, 振り返れば55年 **その3-2**

「茶道」と「茶の湯」の2大プロデューサー 利休と秀吉の胸の内, 付・利休の茶杓

東区・荒田支部

大海クリニック・大海宮崎クリニック

加治木温泉病院

栗 博志・栗 隆志

大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

夏越 祥次

はじめに

私は戦後の日本の復興期, 日本人が皆, 貧しかった時代から, 今日まで生きてきた。

3-4回, 死を身近に感じた経験もしたが, 4分の3世紀を元気に生きてこられた事は, ラッキーであった。

今回は, ちょっとした昔話, と言っても私の学生時代の事と, 戦国時代の秀吉と薩摩の歴史の一齣を振り返ってみよう。

昭和 43 (1968) 年

私が, 別府から鹿児島に来た年である。

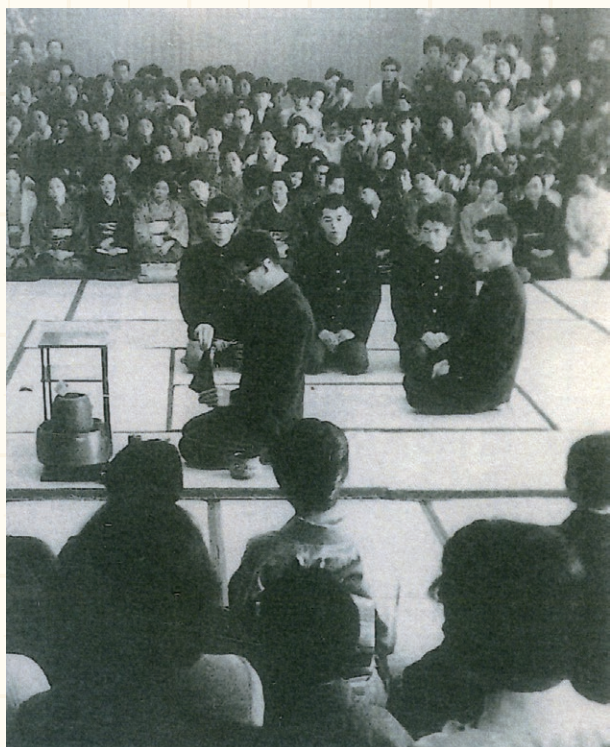


図14 医学部茶道部による平花月(昭和39年)
学生の正装は学生服の時代

図14は, わずかその4年前, 昭和39年の鹿大医学部茶道部の先輩方の, 平花月の様子である。

未だ学生の正装は詰め襟の学生服であり, 来客の多さから, 鹿児島の日常も賑わっていた事が窺える。

当時は, 70年安保改定締結反対運動, いわゆる「安保闘争」の真っ只中であつた。

日本中の大学で, バリケード封鎖が行われていた。

こんな地方の鹿大でも……と驚くばかりであつたが, 新しい建物内の大講義室の入り口には, 床からはずされた数人掛けの机とイスが高く積み上げられ, 休講の日々が続いた。

荒田キャンパスの周囲や, 各学部の建物の周囲には, 大きい立看板が並び, 拡声器ががなり立て, 活動家の人達がビラを配り, ヘルメットをかぶった人達が, シュプレヒコールを叫びながら, デモ行進をしていた。講堂では, 討論会が繰り広げられていた。

講堂と道に面した, 教務課の建物の外にある掲示板に講義予定等を確認しに行くと, 必ず闘士の活動家の人が近寄り, 討論会に出席するよう迫ってきた。

(桜島は, それまで噴火した事がなく, みかんや, 桜島大根など農作物が豊富で, 宝の島と呼ばれていた。その頃, 桜島が噴火し, 火口まで登山していた学生が, 行方不明となったと掲示されていたのが, 記憶に残る。以来桜島は頻繁に噴火を起こすようになる。) 私に討論会に出席するよう, 迫ってきた学生

の一人に、小柄だが元気がよく、キラキラと眼を輝かせていた学生がいた。

彼は後年（1972年）、海外で大きい事件を引き起こした。「え！あの彼が！」とニュースに驚き、何が彼をそこまで駆り立てたのだろう、と考え込んでしまった。

私には分からない。人間の行動には、他人には理解できない事が多いという事である。

私はと云えば、これ幸いとばかり、小学校時代から雑誌「スクリーン」で憧れていた洋画を、週に数回楽しんだ（小学校時代は、日活映画などは、見放題であった）。

当時、鹿児島では名画座とナポリ座が100

円、有楽座と国際劇場が、新作（リバイバルを含む）を上映し、名作が目白押しであった。

デビット・リーンの「ドクトル・ジバゴ」「アラビアのロレンス」「ライアンの娘」の広大な雪、砂漠、海の絶景。ジェームス・ディーンの「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」の心理描写、そして「風と共に去りぬ」「誰が為に鐘は鳴る」「クレオパトラ」などの壮大な歴史ドラマ他、何十もの名作が頭の中に詰め込まれている。

だが「バグジー」「イングリッシュ・ペイシエント」などを最後に映画を観るのをやめた（図15）。

男女の愛憎、運命に対する葛藤などの微妙



図15 左:アメリカ映画「バグジー」1991年 中:アメリカ映画「イングリッシュ・ペイシエント」1996年 右:「イングリッシュ・ペイシエント」（いずれも当時のパンフレットより）

な心理状態を、画像で表現し尽くしたような作品が無くなったからである。

単純かつ直截、脳の表面だけを強く刺激する、娯楽作品が主流を占めるようになった。

例えて言えば、より辛い唐辛子を大量に振り掛けた、激辛食品のように思える。

「ジャイアンツ」での、古い考えの南部の大牧場主のロック・ハドソンが、レストランで受ける息子の嫁への差別に対する乱闘場面、あの人種差別に対する表現の *subtlety*,

あるいは、チャップリン映画の中に込められた *pathos* や *irony*。

私は、そんなものを映画に求めたい。

あの時代、卓越した監督、俳優による沢山の名画を観た事は、ラッキーであった。

映画は *art* から *entertainment, amusement* に移行した。これも歴史の必然であろう。

その他の時間は、教育学部のピアノ室（10室位あり、ほとんど使っている人はいなかった）でピアノを弾いたり、クラブ活動に費や

した。クラブは「舞踏研究会」を選んだ。

姿勢を正し、肩の緊張を抜き、単純に前後方向に歩くだけでも、非常に難しい事を実感した。

部活は、3時頃からクリーナーによる床掃除、床みがきに始まり、下宿に帰るのは9時、10時頃であった。

大学で運動系のクラブ活動を経験できた事は、非常によかった。

あれもこれも、好きな事ができたのは、学生運動の激しかった、あの時代のお陰でもあった。

昭和44(1969)年

1月には、東大安田講堂封鎖解除の闘争が行われた。

当時は、学生も世の中も、良きにつけ、悪しきにつけ粗野でエネルギーに満ち、騒々しく賑やかで活気があった。

若者達の娯楽は、映画、ボーリング、ダンスで、その他、麻雀、パチンコであった。

パチンコ屋前の路上では、軍艦マーチが鳴り響き、レコード店前では新曲が流れ、街中では、時節のクリスマス・ソングなどが、景気を煽り立てていた。

ぎゅうぎゅう詰めのダンスホールでは、若者が深夜まで踊り、飲み屋街も深夜まで、人混みが絶えなかった。

熱気に満ちた時代であった。

選挙カーが、夜中まで連呼するのには閉口したが、今振り返ると、懐しい時代だった。

昭和45(1970)年

3月には、よど号ハイジャック事件が起こった。何が起きても、決しておかしくない時代であった。

そんな中、11月25日にショッキングな事件が起こった。

戦後の日本を代表する作家で、特異な集団「楯の会」を結成し、ボディ・ビルで造

り上げた筋肉を誇示するなど、自身が世間への露出度を高め、また世間の注目を浴び続けていた、時代の寵児・三島由紀夫が、自衛隊・市ヶ谷駐屯地のバルコニーで演説後、何と、割腹自殺を遂げたのである！

正に青天の霹靂であった。

更に森田必勝ら4名の楯の会・会員が、介錯し、三島の首(次いで森田の首)を切り落としたと言う。

介錯に使用された刀は、三島自慢の名刀「関の孫六」、葬儀委員長は、川端康成だった。

三島由紀夫(大正14年-昭和45年,1925-70)は、戦前の日本社会を経験、昭和11年の2・26事件を肌で感じ、第2次世界大戦を経験し、身近な人の死を体験し、そして戦後の社会を生きた。

日本や海外の文学に親しみ、若い時から文才を発揮し、多くの小説を書いてきた。

三島は、文学は言わずもがな、精神と肉体、行動に於て日本の伝統に則った、独自の人生観、美意識、更には使命感を疑いも無く持っていた。

それは、私共のような凡人には、決して理解できないようなものとは思われるが、何となく理解できる気もする。

「至純至高至美」なるものの為に生きたかったに違いない。

45歳の若さで、今生に些かの汚点を残す事なく潔く散る事により、花の人生を全うし、自分の美学、使命を永遠のものとする決断を下したのだろう。

45歳のままの人生を生き続けたかったのだろう。本年、令和7年は、彼の生誕百年に当たる年である。

割腹では、決して即死する事が無い事を熟知している彼は、今際の際でさえも、決して取り乱す事の無きように、更には、自衛隊駐屯地内での不測の事態に備えて、信頼の置ける確実な介錯人、4名を従えていた。

三島の徹底した周到さには、驚きを禁じ得ない。

<付録>録音，三島由紀夫 最期の絶叫

図16は、私が55年間保存していたソノシートである。



図16 「三島由紀夫 最期の絶叫」付録ソノシート
(昭和45年11月25日，週刊サンケイ付録)

「フジテレビニュース部，FNN ニュースから」「三島由紀夫 最期の絶叫」と銘打たれている。

これは、週刊サンケイ臨時増刊「三島由紀夫特集」号の付録である。

現在，話題の渦中にある会社である。

国家から大切な公共電波の使用を許可された会社の体質は，過去数十年間に亘り，地盤沈下を続けている日本社会を象徴しているかのようなのである。

更に一言付け加えれば，55年前の三島の行動は，敗戦により180度，思想・文化・経済などの価値観が転換し，国家としての信念，理念を失い，単なる欧米の追従一辺倒に陥った，日本社会に対する，三島の一大決心のもとの警鐘だったのだろう。

換言すれば，日本が，日本人が守ってきた固有の *roots*, *identity* を放棄し，欧米を目標として，欧米の物真似に終始し，その背中を追い駆け始めた瞬間，正にその時点で欧米の後塵を拝していると言う事実を，気付かせるための，命を懸けた細やかな，そして空しい時代への抵抗・挑戦だったのだろう。

図17は，時代を駆け抜けた日本文化，日本の美に於ける，静・動の2人の殉教者，千利休と三島由紀夫である。

両者の内面を見透すような鋭い，然し何故か深みを湛えた眼差し，精悍な面構え，力強く握りしめた白扇と真剣から放たれる気迫。

然もそこに二人の不思議な程の穏かさを感じるのは，私だけであろうか？

白装束を身にまとった己の姿を，三島は何より遺しておきたかったと思われる。撮影者の実力が窺える佳い写真である。

片や，利休も周知のように，単なる茶頭ではなく，禅の修行を修め，信長，秀吉に従って，幾多の戦場を駆け巡った人物である。

或いは，真黒の鎧・兜に身を固め，同行したやも知れぬ（具足は，表千家に残されている）。

ここに，益荒男振りと手弱女振りの三島の辞世の二首と，利休の禅者としての辞世の一首を提示しておく。

・益荒男が たばさむ太刀の鞘鳴りに

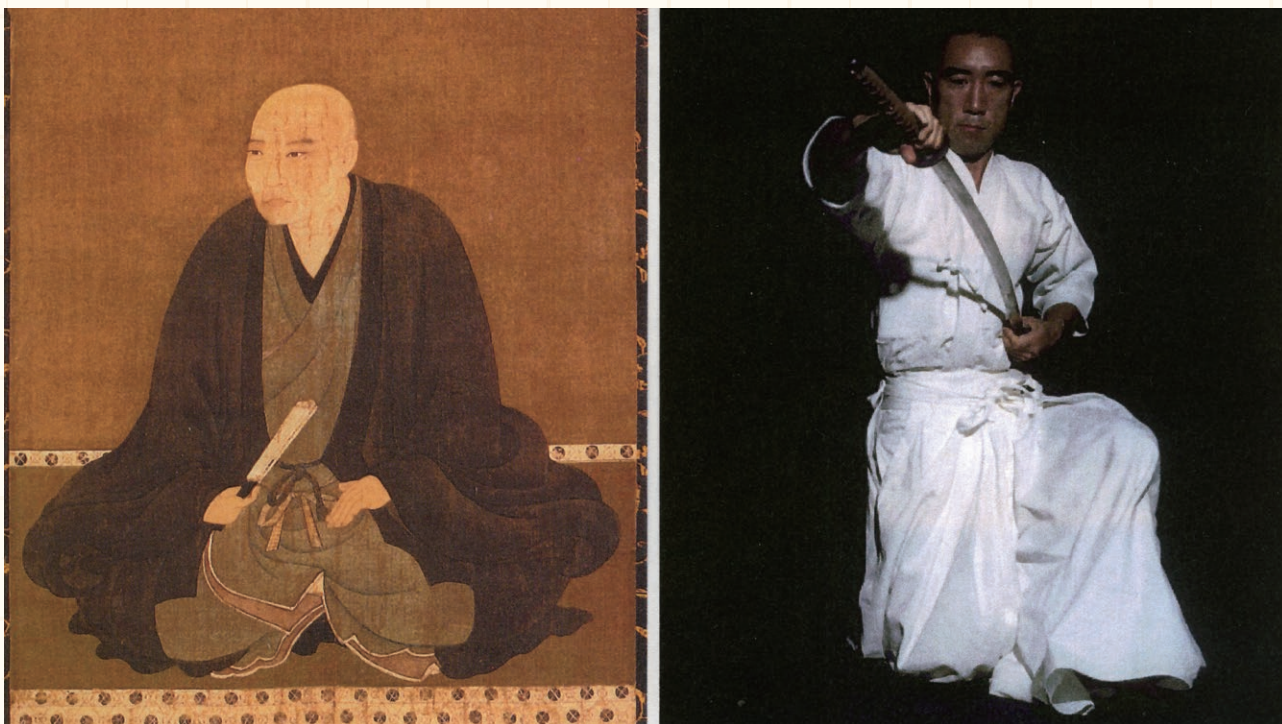


図17 時代を駆け抜けた、日本文化・日本の美、静と動の2人の殉教者、千利休と三島由紀夫
 左:千利休、利休生前の天正11年頃、秀吉の茶頭・62歳頃の利休(正木美術館蔵)
 右:三島由紀夫、居合の鍛錬中の45歳の三島。この約5ヶ月後、三島は自決。(1970年撮影、時事)

幾とせ耐へて 今日けふの初霜 (三島)

・散るをいとふ 世にも人にもさきがけて
 散るこそ花と 咲くさく小夜嵐 (三島)

・提ひつさぐル 我得具足わがえぐそくの一太刀 ひとつたち
 今このとき此時なげうぞ天に抛なつ (利休)

Part 7 利休七哲

戦国時代を代表する武将の中では、織田信長が傑出していたが、突然の本能寺の変後、信長の輩下の中から抜け出し、天下統一を果たすのは、豊臣秀吉であった。

秀吉以下の武将達も、信長の「御茶湯御政道」の時代を生き、茶の湯は高嶺の花であった。信長に茶の湯を許された秀吉の喜びが、如何程であったかは、既に述べた。

利休の孫で、千家3代目となる千宗旦は後年、利休の高弟の大名茶人7人を選び、彼らを「利休七哲」「利休七人衆」と呼んだ。茶

道の歴史に名を残す人達である。

蒲生氏郷がもうじざと (才能を信長に認められ、信長の末娘と結婚、後に利休の次男、千家2代目となる少庵を会津にかくまい、千家復興に尽力した)、高山右近(キリシタン大名、秀吉にキリスト教の改宗を迫られ、明石12万石を捨て、前田利家の客分となる。家康の禁教令でルソン島に追放され、マニラで死去)、細川三斎(別名、忠興、その夫人は明智光秀の娘・玉、通称・ガラシャ)。

その他、芝山監物けんもつ、瀬田掃部かもん、牧村兵部、古田織部の7人である。

7人中、6人に共通する事は、信長そして秀吉に仕えた事である。瀬田掃部のみ、高山右近の勧めにより、秀吉に仕えた。

この7人は「台子七人衆」とも呼ばれる。

利休が台子茶を弟子に伝授するに際し、その対象者を、秀吉が許した7人に限定したという事である。

許可する事により、秀吉は「茶の湯」に於ける自分の権威を保持しようとしたのである(松本見休、要貞集)。

なお「台子」の点前は重要で、現代に於いても「真之行台子」「大円真」を修め、正引次を済ませ、茶名を頂いて初めて、一通り茶を学んだ事となる。

その他、織田有楽（信長の弟）、前田利長、伊達政宗、島津義弘（後記）、黒田如水、荒木村重などの武将が利休の弟子となった。

後日談となるが、天正9（1581）年、秀吉の怒りに触れ、堺での蟄居を命ぜられた利休は、聚楽第屋敷を出て、陸路で淀まで行き、そこから船で淀川を下り、堺の屋敷へ入ったが、淀の舟本（渡し場）で、見送りの為、先回りしていた古田織部と細川三斎の姿を、利休は認めた。

2人の弟子の見送りに利休は感激し、最後に削った茶杓を織部に贈った。後に「泪（なみだ）」と銘打たれたこの茶杓は、利休作の茶杓の中で最もよく知られたものである。

この見送りは、単なる見送りではない。

この事を秀吉に知られば、2人の命の保証は無いかも知れぬ。命懸けの行動である。

弟子（大名）の利休に対する熱い思いが伝わってくる、エピソードである。

秀吉の輩下が、次々と利休の弟子となり、利休を師と敬っている。

秀吉から見れば、利休自身でさえ、自分を取り立て、召し抱えている自分の茶頭ではないか、それなのに……と言う意識も強かったに相違あるまい。

秀吉は、そのような利休に対する羨望の念が強かった。

秀吉が茶の湯を好きであればあるほど、利休に対する羨望は、増したのである。

秀吉は多分、意識はしていなかっただろうが、利休に対する秀吉の最終の答が、天皇をお迎えしての、宮中での黄金の茶室・茶道具による茶会であり、利休、宗久、宗及を従えての北野大茶会であったとも考えられ

る。

兎に角、秀吉は、この2つの茶会により、天下一の茶人として、後世に名を残した事に間違いはないし、利休には、このような茶会は、決してできまい、と言う自負心から、秀吉は満足した事だろう。

Part 8 利休の生涯とその胸の内

本能寺の変により自刃した信長亡き後、豊臣秀吉の時代になり、頭角を現してきた利休は、秀吉の筆頭茶頭となる。利休の茶人としての人生は、順風満帆であった。

利休居士号の下賜に前後して、自身の目指す「侘び茶」の理想の姿も、一つずつ現実のものとなっていった。

天正8（1580）年の利休の茶会に於ける、天王寺屋会記に記された「ハタノソリタル茶碗」、つまり楽家初代となる「あめや倅長次郎」に焼かせたとも言われる「赤（楽）茶碗」、天正9（1581）年の「あかい茶碗」、更に長次郎に焼かせた黒楽茶碗と思われる天正14（1586）年の「宗易形ノ茶碗」、後に、「今焼茶碗」「聚楽焼茶碗」と呼ばれるようになる楽茶碗は、利休の目に叶うものであった。

希少で高価な「唐物」からの脱却である（残念な事に、後年、楽茶碗は驚く程、高額なものになってしまったが……）。

利休作と言われる「山崎の茶室」に関しては、見解の分かれる所であるが、丸太材を用い、土壁のわずか二畳の侘茶の茶室は、天正10（1582）年頃に完成したと言われる。

現存する利休唯一の茶室と言われるのが、京都山崎の「妙喜庵」の茶室「待庵」である。

一切の無駄を除き、派手さを拒否し、簡素ではあるが、一分の隙も無く、落ち着いた雰囲気この茶室は、用の限界と美の見事な融合を具現化している（図18）。

茶道具といい、茶室といい、利休の侘び茶

は、ほぼ完成の域に達したと言っても良いと思われる。



図18 利休の究極の茶室 京都・山崎, 妙喜庵の茶室「待庵」
天正10年頃, 平丸と黒の土壁のわずか二畳の侘茶のための空間

もちろん、室町将軍・足利義政の慈照寺銀閣の「東求堂」の付書院と違い棚のある、四畳半の書院も、待庵同様、上品なもので、広い障子と、明るい内部空間は、後に「綺麗さび」を提唱した、小堀遠州の大徳寺・孤蓬庵の茶室「忘筌」に引き継がれる(図19)。

忘筌の明障子により、制限された庭空間の



図19 足利義政の東山山荘にある, 慈照寺銀閣, 東求堂の四畳半の書院, 同仁齋
正面右の付書院と左の違い棚に注意

広がりには、独特の雰囲気を生み出している。

これらの建物は、日本の美を、数百年後の今に伝えている。

天正13(1585)年, 秀吉は正親町天皇に、^{おおぎまち}関白に任ぜられる。

3ヶ月後の禁中小御所の茶会で、秀吉は天皇に茶を点て献じた。利休は、隣の間で、秀吉を後見。

この時、初めて天皇より下賜された「利休」居士号が使用された。

天正14(1586)年の禁中茶会では、黄金の茶室が使用された(図20)。

利休は名実共に「利休」となり、天下一の茶の宗匠となったのである。

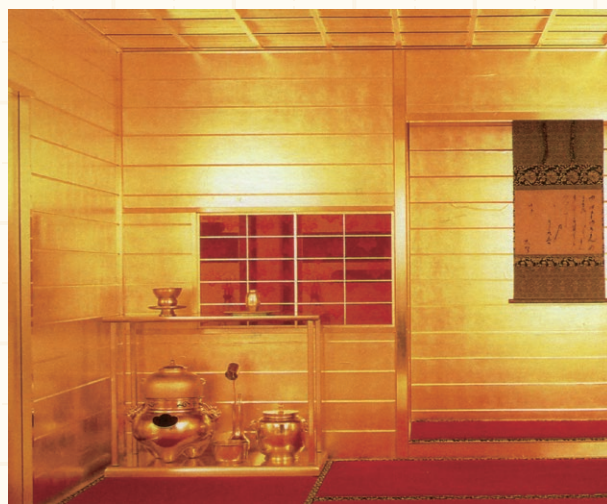


図20 秀吉の黄金の茶室と茶道具 部分
(MOA美術館蔵 復元)

天正14(1586)年, 薩摩(鹿児島)の島津に進攻された豊後(大分)の大友宗麟が、救援依頼の為、秀吉の大阪城を訪れた。

そこで、秀吉の弟・秀長と面会した際の様子を、「内々の儀は宗易、公儀の事は宰相存じ候、御為悪敷事之あるべからず」「宗易ならてハ関白様へ一言も申し上ぐる人之なしと見及び申し候」と伝えている。

内密の事は、利休を通さないと、一言も秀吉の耳に入らないと言うのである。

宗麟の目から見ても、秀吉に対する利休の立場が、茶頭の域をはるかに超えている事に、

驚いたのだろう。

秀吉政権に於ける宗易（利休）の立場を、鮮明、端的に示している。

この頃までは、利休自身、秀吉の元で着実に築き上げてきた自分の立場に、満足していたと思われる。

<付録>秀吉の九州征伐とバテレン追放令

ここで一休みして秀吉の薩摩、九州に拘わる歴史的な話をしよう。秀吉の九州征伐とバテレン追放令である。

バテレン（伴天連）とは、ポルトガルのキリスト教宣教師の事である。

本題に入る前に、15-16世紀の「大航海時代」のポルトガルについて述べる。

1498年、バスコ・ダ・ガマは、アフリカ最南端の喜望峰を越えて、インドのカリカットに到着。インド航路を開拓し、海上航路でのアジア進出の火蓋を切った。

航路上の点と面を結んで、ポルトガルは、多くの植民地を獲得し、いわゆる「ポルトガル海上帝国」を築いた。

アフリカではポルトガル領の黄金海岸、ギニア、コンゴ、モザンビーク、アンゴラ、インドではゴア、セイロン、中国ではマカオ、インドネシアではモルッカ諸島である。

東南アジアの延長線上のターミナルが、我が日本であった。

ポルトガルにとって、香辛料などの交易品と共に、最も重要なものが「奴隷貿易」であった。

アフリカに遠く及ばずとも、バテレンと共に入ってきたポルトガル商人達により、東南アジア人、更には日本人が売買され、ヨーロッパに輸送された。奴隷の定義を楯に、日本人奴隷を正当化する論文もみられるが、日本人の売買を正当化する根拠とはならない。

ポルトガル本国でも、日本を含むアジア人の反ポルトガル、反キリスト教感情の高まり

を憂慮したのだろう。

ポルトガル国王・セバステイアン1世は、1571年に日本人の人身売買禁止の勅令を發布。1595年にはポルトガルで、日本人奴隷の売買を禁止する法律が可決されたと言う。

天正14（1586）年、秀吉は、イエズス会宣教師、ガスパール・コエリョに、イエズス会のキリスト教布教を許可した。

次に、16世紀後半の薩摩の状況と、秀吉の九州征伐について述べる。

天文19（1550）年、鹿児島の内城（現・大龍小）を築いた、島津家第15代当主・島津貴久は、4人の息子・義久、義弘、歳久、家久と共に、現在に名を残す、菱刈、渋谷、肝付、伊地知氏らを降服させ、天正5（1577）年、薩摩、大隈、日向の三州統一を果たした。

その後、貴久から守護職を引き継いだ義久らの島津氏は、肥後、肥前、筑後を傘下に収め、豊後の大友宗麟に迫っていた。

薩摩の九州制覇は目前であった。

窮地に陥った宗麟は、対抗策として、西日本では、山陽、山陰、四国を平定し、天下統一を図っていた秀吉に救援を求めた。

前記、天正14（1586）年の大阪城での宗麟の利休に対する印象記は、この時のものである。

宗麟の救援依頼は、天下統一を目指す秀吉にとって、渡りに船であった。

更に秀吉にとって好都合であった事は、天正12（1584）年に、將軍職任官を辞退し、天正13（1585）年に関白に任ぜられた事である。

頭の良い秀吉は、武門の頂点に立つ將軍より、朝廷の中枢である天皇を補佐する関白の方が上位である事を認識していたのである。

それ故、秀吉は近衛家の養子（藤原姓）となり、関白に叙任されたのである。

天正13（1585）年10月

秀吉は、早速、天皇の權威を楯に「九州停

戦命令」を発した。

大友側は直ちに、島津は激論の末に、やむなくこれを受諾した。

天正 14 (1586) 年

秀吉は、更に追い討ちをかけるように、島津の占領地の大半を大友に返還するようにとの「九州国分案」を押し付けてきた。

島津にとって、この案は到底受け入れられるものではなかった。

「鎌倉将軍・源頼朝以来の名門守護大名・島津に対し、由来無き（出自不明）成り上がり者、秀吉ごときの指図は受けぬ」と交渉は決裂。歴史ある守護大名は、プライドが高かったのである。

然し、日本国と国民を統治する天皇から叙任されている関白である、と言う自負心から秀吉は、上から目線で、この合戦を「征伐」と捉えており、秀吉の権威を一層高める為に有効に利用するのである（私見です）。

天正 14 (1586) 年 7 月

頭のいい秀吉は、まず第 1 に、当事者の大友と島津とを戦わせつつ、第 2 に、自分の輩下とした毛利輝元（中国の雄、安芸を中心に 112 万石、豊臣五大老の一人、関ヶ原の戦いでは西軍総大将、長州藩祖）とその親族・吉川、小早川に先陣を切らせ、一年前、天正 13 (1585) 年の四国征伐で降服したばかりの、土佐の長宗我部元親、讃岐の仙石などを投入。

更に黒田官兵衛は、島津方の武将に、寝返れば、本領安堵するなど、揺さぶりをかけている。

天正 15 (1587) 年元旦

ここに至り、ようやく秀吉は、「九州征伐」の軍令を発する。

温存していた本隊に於いて、筑前・肥後方面への進攻は、秀吉が総大将、豊後・日向方面には、弟・豊臣秀長が総大将として、二面攻撃で、薩摩への進攻を開始した。

この時点で勝敗は既に決していた。

秀吉の 20 万人に及ぶ兵力と知略を前に、勇猛を誇る島津の頭領・義久は、4 月 24 日、秀長に降服し、和睦を申し入れた。

義久の兄弟も、4 月 28 日、最後の激戦・現在の川内駅近くの平佐城の戦いの後、29 日に降服した。

5 月 8 日、義久は出家・剃髪し、黒染の衣をまとい、現在の川内市泰平寺で降服。

秀吉は、文字通り上から目線で、平伏する義久を“よしよし”とばかり赦免し、薩摩の国一国を与えた。

秀吉は 3 月 28 日に九州に上陸して、5 月 8 日の義久の降服まで、わずか 40 日間で九州を輩下に収める事に成功したのである。

義弘には、大隅が与えられ、島津から 2 人の大名が生まれた。家久は急死（毒殺？）したが、息子・豊久には佐土原と西都が与えられた。

義弘は、利休の茶の弟子となり、豊臣家子飼いの武将でも寝返る者がでる中、関ヶ原の合戦では、豊臣方に付き、敵中突破した事はよく知られる。この時、義弘を逃す為、討ち死にしたのが、豊久である。

秀吉の賢い所は、敵の大將の首を打ち取り、滅亡させ、権力を誇る事ではない。

（そんな事を続ければ、信長のように輩下に殺される事もある。「何故だ？」と叫んでも遅いのである。）

早くに降服した者は助命し、恩を売り、支配下に取り込み、勢力を拡大するのである。それにより、秀吉は一層権威を高めるのだ。

5 月 18 日、秀吉は泰平寺を後にし、筑前に向った。

大友宗麟は、喜びも束の間、義久降服の約 2 週間後の 5 月 23 日に死去した。

大村純忠に関しては、立場により評価が分かれる所だが、秀吉の立場で述べる。

秀吉の九州征伐に先立つ6年前、天正8(1580)年、日本初のキリシタン大名・大村純忠は、ポルトガル貿易の旨味を知り、ポルトガル船誘致の為、あろう事か、長崎と茂木をイエズス会に教会領として寄進(治外法権、無期限使用権を与えた)。

イエズス会は、キリシタン保護地、資産の保管、ポルトガル船の安全な寄港地としてこれを歓迎。

更に、キリスト教を奨励、信者は6万人(全国の半数)に達した。

その上、大村は仏教、神教の寺社を打ち壊し、僧や神官まで殺害、更に改修を拒否した者を奴隷として、ポルトガル商人に売り渡したと言われる。大村は、後の「バテレン追放令」の約5週間前に病死した。

(その後、秀吉は、重要な貿易港・長崎な

どの教会領を没収し、自分の直轄領とした。)

秀吉は、泰平寺からの帰途、筑前(福岡)の筥崎(箱崎)で天台宗の元僧・施薬院全宗らにより、長崎がイエズス会領となった事、日本人が奴隷として、長崎から海外に売られている事を聞き及び激怒した。

天皇を奉ずる関白・秀吉にとっては、有るまじき、由々しき事である。

秀吉の対応は素早かった。

6月18日には、11ヶ条の「天正十五年六月十八日付覚」を作成、19日には、5ヶ条から成る「吉利支丹伴天連追放令」を發布した。

泰平寺を立て、わずか1ヶ月後の事である。

秀吉の判断力、決断力、実行力には、只々



図21 醍醐花見図屏風 部分
秀吉と女性と茶の湯、右上と右端中央に茶釜が見える(国立歴史民族博物館蔵)

驚かされる。然しここで条文を解説するスペースはない。

条文では、キリスト教を邪法とし、バテレンが、キリスト教を授ける事を禁止し、バテレンの追放を命じてはいるが、貿易は自由、一般の民が個人の意志でキリスト教を信ずる事は自由としている。また「覚」にあった奴隷売買には言及していない。

中途半端な条文と、その後の社会的状況から、秀吉の政策を失敗とする見解も多いが、全くの逆である。貿易の旨味を堺時代から熟知しているのは、秀吉を措いて他にいない。

秀吉の賢い所は、奴隷問題をわざと条文化しない所にあった。条文化しなくても、バテレンや商人達は、日本人の奴隷化、日本国土の侵害は、即死刑と言う事を、十分認識している。わざと、これを明文化しない事により、他のグレイ・ゾーンの事が発生した時、彼らは日本の不利益にならないよう振る舞わなければならぬ事を悟るのである。

秀吉の気に入らない事をすれば、即死刑。秀吉は、そういう事のできる人間、実行する人間なのである。利休の弟子・山上宗二も、小田原で斬刑、斬殺されている。

何の事はない。「秀吉ファースト」
「NIPPON FIRST」なのである。

自国の利益になる事は、全て *welcome!*
秀吉は、日本国、日本の国民、秀吉自身の考えを侵害しない限り、キリスト教、ポルトガル商人、宣教師すら自由にさせた。

秀吉に限らず、日本人は古来、戦前まで、日本の国を日本人の手で、外敵から守り抜いてきたのである。

更に大村純忠やイエズス会が教会領として作り上げた長崎まで、直轄領とすれば、それを利用せぬ手はない。

九州征伐の手土産としては、十分である。
この頃、秀吉は海外にも視野を広げていた。
スペイン領フィリピンは、いつ秀吉に征服さ

れるか、と戦々恐々の状況であったし、秀吉の視野には、明国、天竺まで入っていた。

また脇道に逸れてしまった。

私は、秀吉の智略、決断力、実行力について述べてきたが、それは、この賢い秀吉に精神的に対抗できたのは、千利休、唯一人であった事を示す為である事を、ここで申し述べておく。

図 21 は、秀吉が死ぬまで愛した茶の湯の湯山、「醍醐の花見」と女性達である。

解説は別の機会で。

(つづく)

